

紹介

●現代史觀 文學博士 三浦周行著

現代國民の文化的生活は其過去に於ける訓練や努力に負ふ所が多いと言ふ見地から、「史家より觀たる大正時代」「東西文明の調和と不調和」の如き現代社會の推移を語るもの及び、「皇太子御成年式」「皇太子の攝政につきて」「原首相の暗殺につきて」等の、現時の出來事を歴史的に觀察したものを第一編現代史觀として收め、「日本國體論」「國體と佛教」「デモクラシーと日本國民性」「文化の下剋上」「昔の商業と商業道德」等國民性や國體を對象として論究したものを第二編國體國民性とし、第三編史傳史話は、明治大正時代の人物を主とした「嗚呼皇太后陛下」「栗田寛先生」「五代友厚翁」や、折り觸れて追懐し、追慕された傳教大師や法然上人の史傳の外に、「國史の教育と社會問題」「文化史とは何ぞ」と言つた風の史話も含めて居る。著書も其卷頭言に記された通り、もこより専門研究の副産物であるけれども、過去の事象にのみ没頭して現代社會

相に無關心となり勝ちな歴史家が、日常吾人の生活に最も關係深く且最も興味を惹くべき出來事を、著者獨特の深遠なる史鏡にかけて解剖もしたり、批評も加へたりして、現代社會に觸れんと試みられたものである。(四六版五〇六頁、古今書院發行、定價三、二〇)(中村)

●支那民俗誌上卷 永尾龍造著

本書は支那文化叢書の第一篇として滿洲考古學會並に滿蒙文化協會より出版せられたるものにして、其の大半は嘗て雜誌『滿蒙之文化』に掲載せられたるものなり、支那年中行事都てを纏めむとするは著者の宿志なるも、取り敢へず其の正月の部のみを纏めたるもの即ち本書にして上篇春立つ頃、中篇年の始め、下篇元宵の祭りの三篇に分ち、更に各篇を三章に分ち、又各節各項を分ちて立春の儀式、春牛、芒神、迷信、竈祭り、除夜、財神賣り、押歳錢、宮中の歳末、桃符、柳の魔除け、春聯、門神、鍾馗、門松、封印、爆竹、元旦雜俎、小年朝、接路頭、星祭り、燈節、藍九節等の諸風俗を評記し、處々其の史的沿革を論じ、外篇には蒙相の正月風俗十二節も附す、跳鬼以下の五枚の口繪、千張紙

以下の三十餘の挿語、立春以下四個のカットは本文の足らざる所を説明し、支那正月風俗に關して廣く材料を集めたること蓋し空前のものたるを失はず、肅親王及び文學博士内藤虎次郎氏の題字、早川滿鐵社長の序文、何れも著者が滿鐵社員として永年支那に住し文物研究に盡したる苦心の業績を賞揚す、總紙數三百四十三頁、支那風俗研究上參考となること決して鮮かならざらむ。〔價、三、〇〇圓〕

● 商業と經濟第二冊

本書は長崎高等商業校研究館年報として昨年の創刊に係る毎年一冊宛刊行する第二冊目の研究報告論文集にして本會に寄贈せらるゝ所なり、收むる所の論著は原始農業と女性(田崎仁義)、開國以後最初の上海貿易(川島元次郎)、朝鮮及臺灣に於ける諮問機關(森文三郎)、Alfred Marshallの標準化理論(馬場誠)、英語教授法の改造を主張す(山崎宗直)、支那古代に於ける氏及び姓の研究(田崎仁義)鐵道に關する智識の我邦に傳はりし門戸としての長崎(武藤長藏)の七篇、他に資料二篇、雜錄五篇、批評紹介四篇、

及び彙報あり、就中専門的立脚地より吾人に最も興味深く讀まれたるものは田崎仁義氏の支那古代に於ける氏及び姓の研究にして、全篇九章より成り、第一章には父と君母と民、民と氏との文字的考證をなして、氏が血族的又は地域的團體の稱なることを論じ、第二章には原始民族の感生思想、原始民族の夫婦別居の風俗より論證して、姓が女系の生身の標識にして、支那の原始的姓が母の所在の地名に起れるもの最も多きを論じ、第三章にて同徳同姓、異徳異姓の説を論じ、以下第四章、姓と五行と五音、第五章賜姓の事、第六章姓は母系に發し徳姓賜姓を経て父系姓に歸着せり、第七章姓と祖先崇拜、第八章氏が大小二方面に發展進歩せること、第九章結論を述ぶるや綿密なる調査と博引旁證の迹、眞に眞面目に而して苦心研究の結果と謂ふべく、此の問題の未だ充分に研究せられ居らざる今日廣く一般に一讀を勸むるに躊躇せざるなり。吾人亦平常此の問題に興味を有せるも未だ研究したることなく、従つて之を一讀して啓發せられたる點甚だ多し。これ特に本篇を此の研究報告より摘出して概要を江湖に紹介する所以なり。但第二章にて姓が母系族制の遺意な

るこゝを論證せられて、感生と夫婦別居の場合を問はず、女子には古く姓ありて存し、支那の神農以下五帝の姓が其母の系統によりて名けられたるは明ありと謂はれ、支那には古くより女子に姓あるこゝを謂はれ居れるも、之に劉師培の説並に王國維が龜甲文研究の結果殷人には未だ女姓無く、周に至りて始めて女子皆姓を稱せるならむと謂ふ説あるに對して一言辯ぜられあるざには如何なる故なるにや吾人固より此の問題を研究したるこゝなく従つて茲に述ぶる所は毫も批評的意味に非ず、唯紹介に當りて聊か附記するのみ、(定價二、五〇、長崎高等商業學校研究館發行)(以上那波)

●大正七年度古蹟調査報告

第一冊 朝鮮總督府

本冊收むる處、濱田委員、梅原囑托提出の「慶尙北道慶尙南道古蹟調査報告」ミ原田委員の「慶尙北道慶州郡内東而普門里古墳及慶山郡清道郡金泉郡尙州郡並慶尙南道梁山郡東萊郡諸遺蹟調査報告書」ミの二編にして、四六倍版本文九十四頁、圖版百十五葉より成る。前者は慶尙北道星

州に於いて發掘調査を行へる三個の古墳、同高靈の三古墳及び慶尙南道昌寧校洞に於ける二基の墳墓に就いて一々其の外形、内部の構造、發見の遺物の詳細なる記載を試み、破壊せる遺蹟を記録の上に復原するに共に、此の調査の結果獲たる遺物中土器の特質、耳飾、刀裝具、帶飾等の金屬器に關しての研究を録し、また古墳そのもの、構造を如上の遺物の内容ミ比較考査して考古學上より營造の年次を推し、其の各の間に多少の年代の相違あるべきも、六朝中期の加羅の古墳ミ見るべきものなりと云へり。文中個々の遺跡の記述に正確を期せるは固より、其の耳飾の條に於いて從來發見の類似の諸例を挙げ製作の技術に關する考察よりして其の源流に及べるが如き、また是等古墳の構造ミ内容遺物ミの關係を内地古墳の示す處ミ比較して其の異同の依つて起る因由を究めんさせるが如き、なほ此の類の注目すべき見解を隨處に示せり。此の報告の編末には醫學博士長谷部言人氏の手に成る「星州古墳人骨調査」の一編あり、其の第二號古墳第一附屬石室及び第六號古墳出土の人骨に關する人類學上の調査の結果を細録せり。而して結論として、人骨の前者は現代の北鮮